

調査の概要

1 調査に至る経緯

調査地は、近鉄大和西大寺駅の西北、奈良市西大寺本町に所在する。調査地の東側を県道谷田奈良線、西側を近鉄京都線が通る。現在、調査地周辺は商業地で、近年も商業ビルやマンション等が建設されている。調査地はこれまで主に木材加工場や住宅として利用されていたが、マンション建設が計画されたため、建設にともなう事前調査として発掘調査をおこなった。

調査地は、平城京右京一条三坪八坪、右京北辺三坊三坪にあたり、調査地のほぼ中央に一条北大路、調査地東側の現県道付近に西三坊坊間東小路が推定されている。右京一条三坊八坪は、奈良時代後半の西大寺造営以後は、同寺食堂院に推定されている。これまで周辺でおこなわれた調査では、食堂院に関連するとみられる遺構や、条坊、北辺坊に関わる遺構を検出しており、今回の調査においても、これらに関連する遺構の検出が期待された。

2 調査経過

2006年4月、関係者との現地協議をおこない、南北約107m、東西約59mのL字型の調査区を設定した。調査は、既存建物の撤去との関係で南北2回に分け、同年5月、南半部分から調査を開始した（第404次調査）。第404次調査では、奈良市教育委員会による西大寺第15次調査（以下、市15次調査とする。他の回数も同様）で検出した遺構の南延長部分や、西大寺食堂院の中心堂舎とみられる建物などを検出した。6月30日には周辺住民を対象とした説明会と、現地の一般公開をおこなった。その後、調査区外に続く大規模な井戸（SE950）を検出したため、調査区中央部分を拡張した。井戸の埋土には多量の遺物が含まれており、土ごと整理用コンテナに入れて研究所へ持ち帰り、水洗・整理作業をおこなうこととなった。引き続き7月より、調査区の北半部分の調査を開始した（第410次調査）。第410次調査では、西大寺食堂院の北限と一条北大路を検出し、さらに北側の北辺坊で奈良時代前半とみられる遺構を確認した。また、検出した遺構の範囲を確認するために調査区の東西辺を一部拡張した。10月7日には現地説明会を開催し、約950名が訪れた。調査終了後、建設予定マンションの設計変更にとまなない、調査区の南東に小規模のトレンチを2カ所設定し、調査をおこなった（第415次調査）。

調査期間は、第404次調査が2006年5月24日から8月30日まで、第410次調査が7月31日から10月16日まで、第415次調査が10月24日から10月31日まで、調査面積は合計で1,900㎡である。

なお、井戸SE950より持ち帰った埋土は、整理用コンテナで合計約1,200箱に及ぶ。遺物の水洗・整理作業は2007年3月現在も継続中であり、本書では、既に整理作業の終了した遺物に限って報告する。

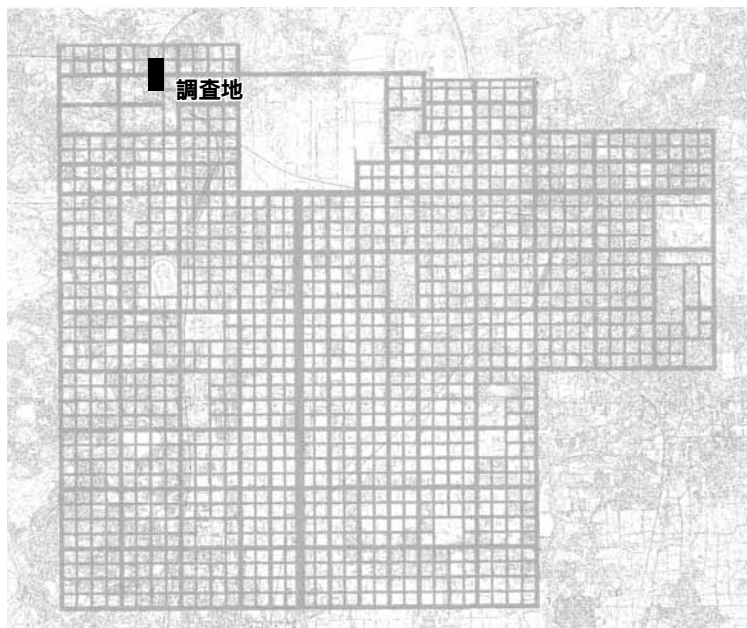


図1 平城京条坊と今回の発掘調査地

3 調査地周辺の既往の成果

ここでは、西大寺食堂院および平城京右京北辺の学説史と発掘調査成果を概観する。

(1) 西大寺食堂院

西大寺の創建と食堂院 西大寺の伽藍配置は、鎌倉時代に作成された西大寺敷地之図(PL.21)・西大寺敷地図・西大寺往古敷地図(いずれも東京大学文学部蔵)などにより推定が可能である。これらをもとにいくつかの復元案が提示されており(後述。図45参照) 食堂院は寺中の東北部、右京一条三坊八坪に比定されている。宝亀11年(780)成立の「西大寺資財流記帳」(西大寺文書。以下「資財帳」と略称)によると、食堂院は次のような舎屋から構成されていた。

食堂院

瓦葺食堂一字 長十一丈、広六丈

檜皮殿 長十丈、広四丈

檜皮双軒廊三字 各長三丈、中広一丈六尺、
東西二字、各広一丈四尺

瓦葺大炊殿 長九丈、広五丈

東檜皮厨 長十一丈、広四丈

瓦葺倉代 長五丈、広二丈

西檜皮厨 長十一丈、広四丈

瓦葺倉代 長五丈、広二丈

瓦葺甲双倉 各長二丈三尺五寸、
中間 長二丈二尺八寸
広一丈八尺四寸

西大寺は、天平宝字8年(764)の藤原仲麻呂の乱の際、孝謙太上天皇が発願した四天王像に由来する寺院で、称徳天皇が行幸した天平神護2年(766)には、造営が進んでいたと推測される。講堂や総寺僧房の存在は確認できないが、国家公認の財産目録に記された食堂院の堂舎は、宝亀末年に実際に建ち並んでいたであろう。

西大寺伽藍の沿革 平安時代に入り、西大寺は次第に寺勢を衰えさせていく¹⁾。そのためか、平安時代前期の関連史料は、建物の顛倒を記すものが多く、承和13年(846)にはすでに「講堂」(薬師金堂か)の罹災記事がみえる(続日本後紀)。次いで延長年間(923~31)には、相次いで塔の火災記事がみえ(日本紀略・扶桑略記)。応和2年(962)には「食堂一字」が大風雨により顛倒したという(日本紀略)。さらに永祚2年(990)にも「西大寺」の焼亡記事がみえる(扶桑略記。西寺の可能性もある)。

平安時代中期以降になると、伽藍の修造記事が散見する。遥かに時代の降る鎌倉時代の記録には、かつて露仏となっていた四王堂の四天王像に、僧威精が「形ノゴトク堂ヲ立テ」、その後「次第ニ繁昌」したと伝える(興正菩薩御教誡聴聞集²⁾)。寛弘8年(1011)には西大寺塔実検文が奏聞されており、この頃、塔が再建されたい。万寿4年(1028)には、別当憐因が諸寺司定において「十二所修造」を記した解文を奏聞するが、「諸司大衆解文」がなく「成功」を知り難いため、重任を認められなかった(以上、小右記)。その後の修造はやや低調で、永承3年(1048)には、鐘楼倒壊後放置されていた鐘が興福寺に運ばれ(造興福寺記)。元永元年(1118)には、別当実覚が、まったく本寺を修理せず大破におよんだことを嘆かれている(中右記)。

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、再び修造の記録が残る。仁平3年(1153)には前別当覚珍が塔修造の功などで、建永元年(1206)には覚芸が忠恵の東大門造営功の譲により、それぞれ権律師に任じられた。また、建保6年(1218)には塔供養もおこなわれている(法隆寺別当次第)。この時期の修理・造営は、叡

著作権の関係で公開出来ません

図2 「西大寺資財流記帳」(部分) 西大寺蔵

尊による西大寺復興の前史として評価できるが、こうして次第に復興されてきた寺観は、鎌倉時代末期に秋篠寺が作成した堺相論図（東京大学文学部蔵）に見事に描かれているのである。

食堂の再生と終焉 応和2年（962）に顛倒した食堂は、平安時代後期までに再建されていたらしい。嘉承元年（1106）には、弥勒金堂倒壊の後、その仏像は食堂に安置されていると伝え（七大寺日記）保延6年（1140）の記録によると、食堂と四王堂および塔1基のみが確認される（七大寺巡礼私記）。これらの史料によると、食堂の再建が12世紀初頭以前にさかのぼることは確実であり、比較的修造の盛んな11世紀前半頃までに再建され、弥勒金堂顛倒を機に仏堂に転用されたと推測される³⁾。降って建長3年（1251）には、食堂（弥勒金堂）仏事の用途は、「弥勒堂免」「正月十二日行僧（壇）供田」「毎月五日念仏御供田」「蓮華会」「念仏田」「燈油田」「不斷香田」などの寺本所領の料田から調達されていた（西大寺寺本検注并目錄取帳案。西大寺文書）。

徳治2年（1307）食堂が焼失する（一代要記）。この後、弥勒金堂の再建はなかったが、以上の史料によるならば、西大寺食堂は機能を変えつつも鎌倉時代末まで存続していたことが確認される。

古代寺院と食堂 古代寺院の食堂は、僧の日常的活動の拠点と位置付けられるが、史料に乏しく、その実態は未解明な部分が多い。わずかに、法会における食堂の史料が注目される。

やや時代の降る寛和2年（986）の記録は、円融太上天皇の菩薩戒受戒に際して、戒壇院食堂でおこなわれた饗応の様を克明に伝えている（太上天皇御受戒記）。このとき東大寺の大炊屋では、15石入りの甑で米が炊かれ、数十人が轆轤を用いて甑に下ろし、20人許が鋤をもって飯を^{くず}頰し、樋に水を引いて飯を洗っており、法会の後には1,000名の僧に熟食を供した。法会と食事の関係がみてとれる史料として注目されよう。

他方で、早くも9世紀後半に食堂の機能低下がうかがわれる史料も存在する（貞観10年（868）禅林寺式。宮内庁書陵部所蔵文書）。その第4条によると、真紹は、施主が寺院に來り法事のすべてを寺に任せる場合には、僧はすべて食堂に集まり、平等に受食し所作に従い場を移さずに喫食することを要請した、とみえる。この史料は、僧伽集団の平等原則を具現する食堂での共食原理が崩壊しはじめていることを示すものと解され⁴⁾、同じ頃に確認される食堂仏堂化の進展とあいまって⁵⁾、古代食堂の機能が思いのほか早く低下していた可能性も否定できないであろう。

（2）右京北辺

右京北辺の学説史 平城京右京には、二坊から四坊にかけて、一条北大路に北接する2坪分の張り出し部が存在したとされ（以下、張り出し部を便宜的に北坪、南坪と称する）。その範囲は、北浦定政の「平城宮大内裏跡坪割之図」にも図示されている。ところが、「一条北辺」は奈良時代の史料にはみえず、大和国当寺敷地図帳案（西大寺文書）にみられる長承3年（1134）注文以後の史料に散見すること、北辺の遺存地割は秋篠寺へ至る西三坊大路延長部分によく遣り、京北条里と重なる北坪では乱れが生じていることから、その存在を疑問とする意見が出されてきた。

北辺否定説にたつ喜田貞吉は、北辺を、奈良時代終わりに北へ2町拡大したもので、京域とは認められないと述べた。その後、関野貞もこの理解に与し、大井重二郎は、西大寺の寺領区画に用いた便宜的な呼称と理解している。一方、田村吉永、大岡實らは北辺を平城京の京域と認めるが、北辺肯定説にも、南北2坪とみる通説のほか、南坪1坪分のみとみる説、南北幅の長い1坪とみる説があり、その存否と範囲とをめぐり理解は一定しない⁶⁾。北辺の存否をめぐり理解の相違は、西大寺寺域の北を限る「京極路」や西大寺寺域そのものの比定と密接に関わるものでもあった。

西大寺造営と右京北辺 混迷していた北辺をめぐる議論は、発掘調査の知見を契機に再び活発になる。西隆寺の発掘調査成果により、修理司と造西大寺司・造西隆寺司の密接な関係が指摘された⁷⁾。近年井上和人は、北辺を西大寺造営に際して不足した宅地を補う意図で設定された京の拡大部分ととらえ、修理司を北辺坊造営官司と理解するとともに、遺存地割の精査にもとづく独自の西大寺寺域論を展開している⁸⁾。

北辺の存否と「資財帳」が示す創建期の西大寺寺域に関する諸説は、なお鉄案をみない。北辺北坪の地形は、西に入り組む小谷にあたり、南北2坪説の推定北限付近には埋没河川の痕跡も認められるため、現地表面の遺存地割を古代の地割を踏襲したものと速断することはつつしまなければならないが、多方面からのさらなる検討が期待される。ともあれ、北辺の北坪における大路クラスの条坊側溝や奈良時代に属する明確な遺構の検出が、100年におよぶ論争に終止符を打つものと思われる。

(3) 調査地周辺の発掘調査

西大寺食堂院推定地の発掘調査 西大寺食堂院推定地にあたる平城京右京一条三坊八坪でこれまでにこなわれた発掘調査の成果を確認しておく⁹⁾。

市8次調査では、本調査区東南の西大寺東面築地推定地が調査されたが、奈良時代の明確な遺構は検出していない。次いで、市12次調査では、今回の調査区に南接する道路南側で1辺2.1m程度の大型柱穴7基を検出しており、食堂に関わるものと推定された。また市15次調査では、今回の調査区に東接する部分で、南北方向に延びる凝灰岩列と、合計28基の埋甕が並ぶ埋甕列を検出しており、食堂院内の施設に関わるものと推測されているほか、検出された2条の南北溝は、食堂院東限築地塀の西雨落溝および西三坊坊間東小路西側溝と推測されている。

奈文研第242 - 19次調査は八坪の西端部を調査対象とするもので、掘込地業をとまなう基壇建物を検出した。また、(財)元興寺文化財研究所の調査(以下、元興寺03年調査と略称)において、東接する一坪から出土した「同法」と記した墨書土器は、西大寺寺域を考えるうえで見過ごせない遺物である¹⁰⁾。

推定北辺坊の発掘調査 条坊側溝、および建物遺構を検出した調査を概観する¹¹⁾。

一条北大路について。奈文研103 - 16次調査、同131 - 27次、同112次 - 7次のほか、西三坊大路との交差点付近(市430次調査)で、北側溝の可能性のある東西溝を検出したが、いずれも若干の振れをもつことから不確定な要素をはらんでいた。近年、元興寺03年調査で南北両側溝を検出し、その位置がほぼ特定された。一方、右京北辺の道路痕跡は、奈文研103 - 16次調査において検出した南北溝が北辺二坊二・三坪の坪境小路に相当する可能性があるのみで¹²⁾、奈文研151 - 26次調査・市322次調査では、推定位置に坪境小路は検出され

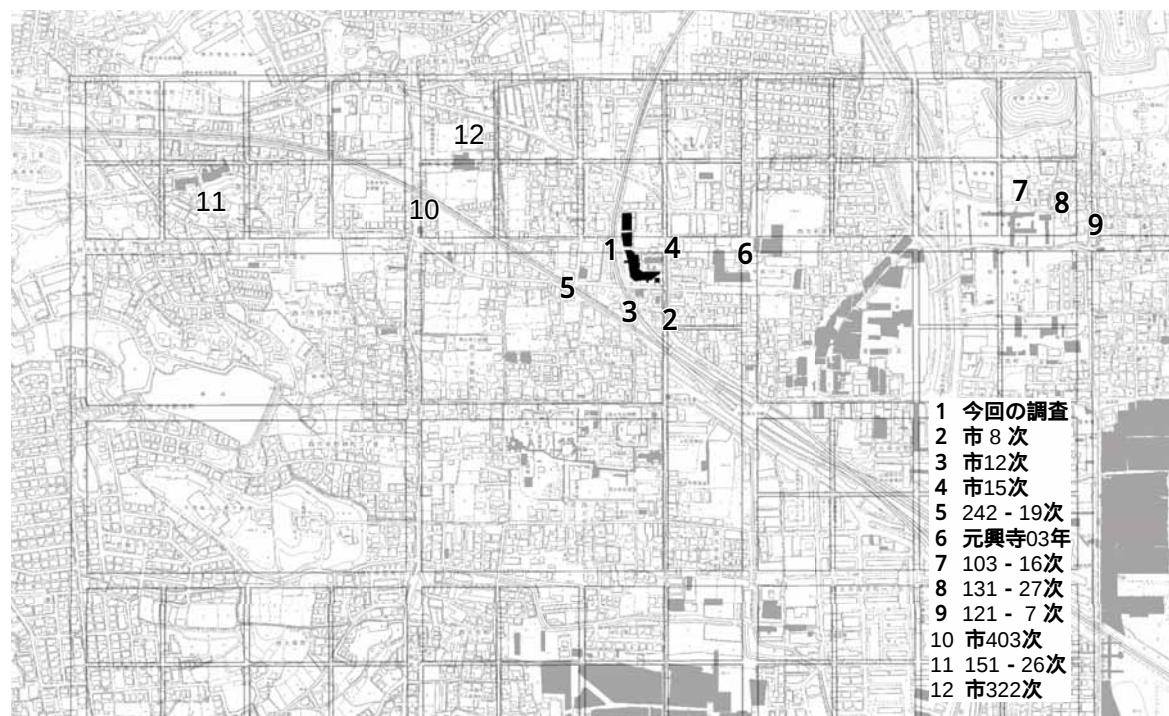


図3 調査区周辺の調査 1:12,000

ていない。

建物遺構について。奈文研103 - 16次調査・同151 - 26次調査において奈良時代前半にさかのぼる掘立柱建物を確認している。ただ、いずれも条坊遺構との関連は明確でなく、京域に属するか否かの判断は保留せざるをえない。これに対して、市322次調査では、奈良時代（後半か）および平安時代の遺構を確認しており、北辺に関わる遺構として注目される。

右京北辺の関連遺構は、北坪の条坊遺構の検出事例に恵まれず、建物遺構の時期比定など課題も残されている。その造営時期と範囲の検証は、なお今後の調査成果に俟たねばならない。

- 1) 太田博太郎1979「西大寺」(『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店。初出1973年)を参照。
- 2) 田中久夫氏は、威精を長保6年(1006)から長和元年(1012)まで西大寺別当に任じた輔静の誤りとする(日本思想大系『鎌倉旧仏教』岩波書店)。
- 3) 保延4年、西大寺別当済円は「良堂」修造の功、あるいは「四王堂」造立の功により律師に任じられた(西大寺別当次第、東寺文書甲号外30号。三会定一記大治5年(1130)条)。この「良堂」は金堂ないし食堂の誤とみる理解もあるが、嘉承元年に食堂が存在することからやや不審である。その点で、保延4年頃の造営は、嘉承元年にみえず保延6年には確認される四王堂のこととみる方が時期的に矛盾しない。「良堂」は文字通り「良き堂」と理解できるのではないか。
- 4) 赤松俊秀1969「食堂と学頭」(『古事類苑月報26』宗教部三、吉川弘文館)。
- 5) 山岸常人2004「中世寺院の僧房と僧団」(『中世寺院の僧団・法会・文書』東京大学出版会。初出1989年) 同2004「中世仏堂の空間と儀礼」(国立歴史民俗博物館編『中世寺院の姿とくらし』山川出版社)は僧房の仏堂化を論じる。なお、中世西大寺の僧堂は、古代食堂の理念が再現されたものともとらえられよう(藤井恵介2004「律宗における僧食と僧堂」、『中世寺院の姿とくらし』前掲、参照)。
- 6) 北辺の存否をめぐる主な研究は、否定説として、喜田貞吉1906「平城京の四至を論ず(一)~(七)」(『歴史地理』8 - 2 ~ 5・7 ~ 9) 関野貞1999「平城京および大内裏考」(『日本の建築と芸術』下、岩波書店。初出1907年) 大井重二郎1953「京北條里の起点と西大寺占地の関係並に北辺坊の存在について」(上)『史迹と美術』242・243) 同1966「京北條里の起点と大和国添下郡京北班田図について」(『平城京と条坊制度の研究』初音書房) 肯定説として、大岡實1966「西大寺」(大岡實先生退官記念事業会編『南都七大寺の研究』中央公論美術出版。初出1933年) 田村吉永1933「西大寺の四至及其居地並に平城京の北辺坊について」(『史蹟名勝天然紀念物』8 - 9) 松本修自1990「西大寺伽藍の変遷」(奈良県教育委員会・奈文研『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』) 奈良県立橿原考古学研究所1994「平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪」などをあげる。なお、関野は当初北辺坊の存在を認めていた(関野1905「平城京及大内裏に就て」『建築雑誌』227)。また、大岡には、後の北辺坊南北1坪説、西大寺造営による拡大説の原型ともいべき指摘が認められる。
- 7) 西隆寺跡調査委員会1976『西隆寺発掘調査報告』、奈文研1993『西隆寺発掘調査報告書』。
- 8) 井上和人2004「平城京右京北辺坊考」(『古代都城制条里制の実証的研究』学生社)。
- 9) 奈良市教育委員会1994『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成5年度』、同2000『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成9年度(第2分冊)』、同2006『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度』、奈文研1994『1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。
- 10) 財元興寺文化財研究所2005『平城京右京北辺』。
- 11) 奈文研1978『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、同1984『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』、奈良県立橿原考古学研究所1986『奈良県遺跡調査概報1985年度(第1分冊)』、奈良市教育委員会1996『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成7年度』、同1998『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成9年度(第2分冊)』、同2001『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成11年度』。
- 12) 奈文研1978(前掲注11)。同2003『平城京条坊総合地図』参照。